

★新入会員紹介★



100 km 先の世界 岩井女弦

小生、藤沢在住市民マラソンランナー兼市民詩人。39歳独身男子。金木犀の香に誘われ追憶に浸り、かつての恋を描きたい訳では無い。孤独で不安だとか泣き言を綴るつもりもない。一体この指先はこれから何を描こうというのか。肝心の婚活もせずに。

来月1月に宮古島で100 km マラソンの参加を予定している。未だ到達したことの無い100 km 先の世界に足を踏み入れようと胸は高鳴っている。日課のランニングと並行して、その世界を描く為そるそる指先を柔らかくしておこう。

(推薦) 荒船健次・新井知次・服部剛



すべての始まりはここから 小桜ゆみ

震災直後に、「詩だけはもう二度と手放したくない」と初めて詩人会に自分の思いをぶつけるメールを送った。その時窓口担当だった人からの一通目の返事を読みながら確信をしたのだった。その人がどんな人か何もわからないまま、今後の自分の人生となる人であることを理解できたのだった。

「身内に甘くしたくない」という夫の言葉があったことで3年が経ったが、ようやく結婚式に出席していただいた油本理事長に入会願いを出し、こうして希望を一つ実現するにいたった。

(推薦) 油本達夫・小林妙子・光富郁壘



略歴 佐相憲一

生まれも育ちも横浜です。大阪などを経て東京に住んでいます。が、永遠のハマっことして、詩・評論・エッセイなどを書いてきました。自分にとって詩とは世界と心の本質です。地球の命に耳を澄ませる詩の心が、荒ぶるこの時代に求められているでしょう。

1968年生まれ。詩集『愛、ゴマファザラ詩』(小熊秀雄賞)、『心臓の星』『港』『時代の波止場』など7冊。詩論集『21世紀の詩想の港』、『エッセイ集』『パラードの時間』この世界には詩がある。共編著多数。各地の詩運動に関わっている。

(推薦) 植木肖太郎・洲史・中上哲夫

会員消息 順不同・敬称略

【詩書】

川端進『バツコスの唄』(花梨社) 2014年9月7日刊
宗田とも子『時を運ぶ折り舟のように』(ふらんす堂) 2014年9月26日刊
広瀬弓『みずめの水玉』(思潮社) 2014年9月30日刊
佐相憲一『エッセイ集』『パラードの時間』(コールサク社) 2014年11月23日刊

【詩誌】

「じゅ・げ・む」31号 発行 田村くみ子
「よこはま野火」67号 編集・発行 菅野眞砂
「港の詩人座」34、35号 発行 植木肖太郎
「セントラー座」2号 編集 大石規子
「地下水」213号 編集・発行 保高一夫
「アル」50号 発行 西村富枝
「狼」24号 編集・発行 光富郁壘
「青い階段」105号 発行 浅野章子
「象」116号 発行 篠原あや

【会員の作品発表誌】

「じゅ・げ・む」31号 宗田とも子
「歷程」590号 黒岩隆
「流」41号 山本聖子
「榛名団」12号 広瀬弓
「解纜」157号 弓田弓子
「竜骨」94号 奥津さちよ
小林妙子
「よこはま野火」67号 馬場晴世
「はんだゆきこ 疋田澄 森下久枝 日本未来派」227号 壁淑子
植木肖太郎 細野豊 柳田光紀 若林克典
「花」61号 下川敬明 田村雅之
「午前」6号 平林敏彦
「潮流詩派」239号 山本聖子
「るなりあ」33号 荻悦子
鈴木正枝
「ERA」第三次3号 今泉協子
方喰あい子 田村雅之 細野豊
「ゆすりか」102号 禿慶子
「セントラー座」2号
うめだけんさく
「山脈」第二次12号 石原武
今泉協子 桜井さざえ 宗美津子 三上透
「関西詩人協会会報」75号 中村純
「地下水」213号 方喰あい子 新沢まや 石原妙子 関中子

林柚維

「左庭」29号 伊藤悠子
「いのちの籠」28号 梅津弘子
奥津さちよ 佐川亜紀 佐相憲一 中村純 渡辺みえこ
「アル」50号 阿部はるみ
「木偶」95号 広瀬弓 仁科理 藤森重紀
「詩と思想」10月号 桜井さざえ 進藤友佳 田中裕子 中村純 光富郁壘 渡辺みえこ
「漪」38号 新沢まや 荒波剛 菅野眞砂
「タルタ」31号 田中裕子 福原恒雄
「狼」24号 浅野言朗 梅津弘子 坂井信夫 坂多瑩子 三浦志郎
「青い階段」105号 荒船健次 小沢千恵 坂多瑩子 福井すみ代 森口祥子
「PO」155号 関中子
「象」116号 いわたとしこ
うめだけんさく 加瀬昭 佐藤裕 三上透
【その他】
服部剛 9月28日清澄白河へそら庵で開催の「ぼえとりー劇場すらむ!&村田活彦のフランスポエトリーレポート」で司会を務める。下川敬明も出演して優勝。

横浜詩人会

今後のスケジュール

問合せ先 横浜詩人会事務局 油本理事長まで。
総会・新年会 2015年2月15日(日) 14時~17時
会場 リーズベイホテル 会費 6000円
※詳しくは8頁をご覧ください。

会員募集中!

入会希望者をお知らせください。詳細は油本達夫理事長まで。
〒220-0054 横浜市西区境之谷 30-19
電話 045 (516) 3182
メールアドレス ta_beat@kni.biglobe.ne.jp
また、ホームページでは入会申込書をダウンロードできます。

理事会報告

□10月4日(土)第6回理事会野毛地区センターにて(15時~17時)。

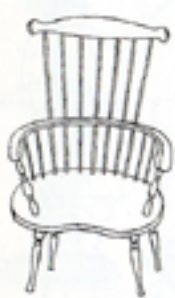
(1)「夏のさかりの詩とジャズ」報告。40名ほどの参加で、朗読は12名。そのうちの2名は飛び入りで、盛会だった。新たにピアノを担当していただいた田中信正氏も好評だった。

(2)第46回横浜詩人会賞授賞式について。理事は10月12日午後1時集合。1時半受付開始。受付は日野、方喰両理事に小林妙子氏。2時授賞式開始。開会挨拶は司会の理事長。中上会長挨拶のあと、選考経過報告・選考委員紹介は佐川選考委員長。授賞は会長と神奈川新聞社より。受賞者紹介は西村理事。花束贈呈、受賞者挨拶のあと休憩。祝贺パーティでの来賓挨拶は神奈川新聞社文化部長と神奈川近代文学館事務局長。パーティの司会は西村、服部両理事を予定。(3)詩人会通信について。292号は送付済み。293号は来年1月1日発行予定で進める。巻頭エッセイは宗田とも子氏に依頼予定。第46回横浜詩人会賞授賞式を主とした構成で進める。

(4)神奈川新聞の連載について。来年1月までの陣容を確認。以降は次年度理事会に委託する。(5)理事会改選について。11月中旬ごろ改選に関わる文書、投票用紙を発送予定。投票は12月4日必着、締切り。開票、集計は次回の12月5日理事会で実施する。(6)会計より報告。未納は20名ほど。詩人会賞基金は計9万4千円をご寄附いただいた。

(7)横浜文芸懇話会の報告。横浜文学賞の選考委員会は10月15日に開かれた。10月23日に過去の受賞者である江刺昭子氏の講演会を開催。12月初旬ごろ本年度の横浜文学賞授賞式の予定。

(8)新入会員。岩井女弦、小桜ゆみ、佐相憲一3氏を承認。(9)次回理事会。12月5日(金)、16時半より野毛地区センターにて。



理事会、バトンタッチ。 油本達夫

二年前、前の期の理事会を晴れやかな表情で退任していく理事たちから引き継いで、それから二年間を思い描きながら、引き受けた荷物の重さに、あらためて身震いを覚えていた。私事ではあるが、今年度が四十三年間つとめた仕事の定年退職にあたり、それと横浜詩人会の理事会のバトンタッチがあり、さまざまな感懐がないままになって、たいそうな瞬間を迎えることになるのだろうか、と、漠然と想像していたのだが、何のことはない、坂道を転げ落ちるような二年間があつたという間に過ぎて、本職のいろいろな事情も重なって、バトンは何処に置いた？とウロウロうろたえるばかりである。あれもやりたかった、これもやりたかった、と後悔が浮かぶのは本職も詩人会も同じ。詩人会のイベントの柱である、セミナー、詩画(書)展、朗読会、は、もう少し会員の知恵や力を拝借して新しいことにも挑戦すべきだったのでは、などなど。

例えば、一九九一年の平林会長時代の取り組んだいくつかのイベントは、今更ながら振り返って教訓をくみとるべきものである。水川丸を主会場に開かれ、単発ではあつたが盛大な「ネプチューン詩祭」、扇谷義男氏からはじまる「先達詩人を囲む会」、第一回が「ジャズメン倶楽部」で開かれた「真夏の夜の詩とジャズ」、さらにそれ以前、川口敏男会長の肝煎りで始まった「現代詩セミナー」。これは、今年の八木忠栄氏の「現代詩と落語」で、二十七回を数える。それぞれのイベントが、詩人たちの「詩的生活」に大いなる肥料をまいた。今度は何が得られるのだろうか、今年はどうな詩的邂逅があるのだろうか、と、会員の期待と意欲がそれぞれの場集まってくる、そのような「想い」の重なるイベントであり、会であつた。自分はその中で、形にはならない、しかし大切な「モノ」を確かに受けとってきた。そのような「想い」とか切実さを、今、実感できているのだろうか？

バトンタッチとは、そのことをしっかりと手渡すことであり、しつかりと受け止めることであるはずだ、と、会員の皆様にお伝えしたい。

ドック・ヤード

先日の理事会の後の食事会で、「日本語の母音が五つしかないけれど、〇〇語は沢山あるから大変だよね」という様な会話があつた。「何！母音が沢山あると？」と私。そこでちょっと調べてみる事にした。

母音とは…ことばを発音するときの音節のひとつで、声帯の振るえを伴う有声音であり、舌歯、唇または声門で、口からの息の通う道を完全に、部分的に、あるいは瞬間的に閉鎖したりせず、また息の通り道を狭くすることによって息の摩擦音を伴うこともない、ある程度の時間声を保持する持続音である。

分類 … 円唇母音 非円唇母音 … 前舌母音 後舌母音 … 中舌母音 … 挟母音 半挟母音 半広母音 広母音

二重母音と呼ぶ。三種類の調音があるなら三重母音と呼ぶ。二重母音も三重母音もあくまでひとつの母音であり、一音節である。長母音 … 母音はその持続時間の長さによって長母音と短母音に分けられる。鼻母音 … 鼻から息を出す母音を鼻母音と呼ぶ。

ふむ、辞書を取り出してみる。この辞書には母音として、二十二音ある。この辞書には四十七ある。この辞書は六つである。私にとって、日本語にはない曖昧な音はひとくりりにされていただけ、実は幾つにも分類されていたとは。ところで、日本語には母音が五つしかないとい書いたけれど、方言によっては五つとは限らないとある。となると、さつき記した辞書の母音の数は、いわゆる共通語(標準語)を基にした数であろう。

この原稿を書き終え、CDプレーヤーから流れるジャズを聞きながら、窓の外を見て、「今日は、半挟母音の様な日だったな」と思う……? (日野)

編集後記

2年に渡る理事としての任期も、この後記を書いている段階では、残すところあと1カ月ほどになりました。ホッとしているのが偽りのない心境です。

2007年の第39回横浜詩人会賞をいただいて以来、いつかは何かの形で、特に理事をひき受けるなどの形で「恩返し」をしたいなと思いつつ、他の団体の役員などが重なったりして、その機会がなかなか訪れませんでした。2年前に多少の余裕が出て、5年越しの思いが叶った次第です。

横浜詩人会にとって、私が微力を尽したことで、何か役に立ったかという点、それは、なかなか難しい判断だとは思いますが、個人的には、まあ、多少は、と甘い見方もしています。

それより、受けたものが多くありました。特に、理事会での議論終わつたあとの懇親会での雑談・放談は、ヨコハマは違うな、と感じさせてくれました。東京や小田原とは違う、ヨコハマの味。これは横浜在住の皆さんにはお分かりにならないものかもしれませんが、

「横浜の品格」とでも呼びたい、洗練されたものを、些細なところにも感じるのです。詩や文学、世相を笑いとばして話しながらも、その底に流れている、人間に対するあたたかい見方。それを感じただけでもこの2年は大正解でした。

宵闇迫る野毛の街を、居酒屋に向かいながら、とつぷりと暮れた帰り道を、ぞろぞろと歩きながら、次はどの店に行くかと舌なめずりをして流れる姿は、傍目には単なる呑兵衛オヤチ・オバハンの徒党でしょう。でも、その内側には熱い血がたぎっている(私以外の理事さんたちのことです)。それを感じながら歩いていると、理事の一員に加えてもらつて良かった！と思う毎月でした。

理事の皆さん、会員の皆さん、ありがとうございました。次年度理事会へもご理解、ご協力をよろしく願います。(村山)

詩人会創立 1958年10月25日 「通信」創刊1961年2月10日 会員数 129名(11月30日)

横浜詩人会

2015 総会・新年会

日時 2015年2月15日(日) 14時より

場所 ブリーズベイホテル

〒231-0063 神奈川県横浜市中区花咲町1丁目22-2

電話 045-253-5555 URL <http://www.breezabay.co.jp/index.html>

会費 6000円

(年会費の受付はいたしません。同封の郵便振替をお願いします)

【会場への所要時間】

私鉄利用の場合

- 横浜市営地下鉄ブルーライン「桜木町」駅より徒歩3分
- 地下鉄みなとみらい線「馬車道」駅より徒歩7分
- 京浜急行線「日ノ出町」駅より徒歩10分

JR利用の場合

- JR京浜東北・根岸線「桜木町」駅より徒歩3分

※JR、地下鉄でお越しの際は、桜木町駅「野毛ちかみち連絡口 南2番出口」をご利用ください。

